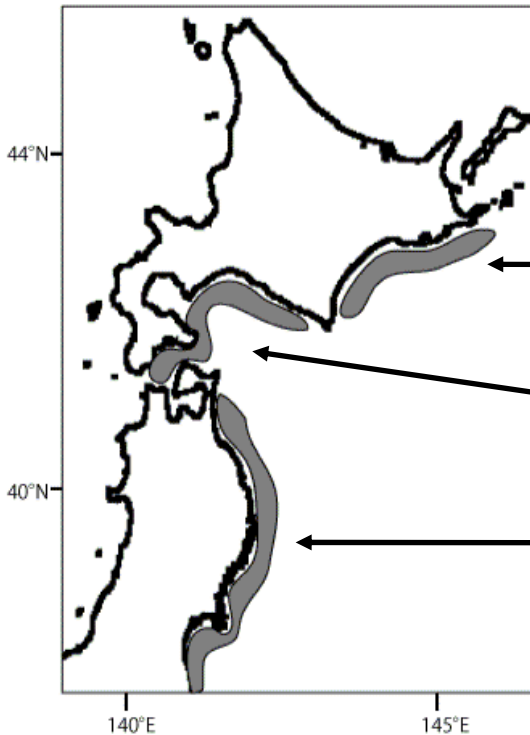


平成27年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産総合研究センター
北海道区水産研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(平成27年8月～9月)のポイント



常磐～道南太平洋海域のスルメイカの来遊量は前年並み、
道東太平洋海域は前年を下回る。

道東太平洋海域：
来遊量は前年を下回る。
魚体は前年より大きい。

津軽海峡～道南太平洋海域：
来遊量は前年並み。
魚体は前年より大きい。

常磐～三陸海域：
来遊量は前年並み。
魚体は前年並み。

問い合わせ先

国立研究開発法人水産総合研究センター 北海道区水産研究所

担当：塚本、大迫

電話：011-822-2131、ファックス：011-822-3342

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://www.fra.affrc.go.jp/>

<http://hnf.fra.affrc.go.jp/>

平成27年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2015年8月～9月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域

対象漁業：いか釣り、底びき網、定置網、まき網

対象魚群：冬季発生系群（2015年級群）

1. 常磐～三陸海域（いか釣り、底びき網、定置網、まき網）

- (1) 来遊量：前年並み。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年並み。

2. 津軽海峡～道南太平洋海域（いか釣り、定置網）

- (1) 来遊量：前年並み。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年より大きい。

3. 道東太平洋海域（いか釣り、底びき網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年より大きい。

I 予報の説明

2015年6月上旬～6月下旬に実施した漁場一斉調査の結果、6月までの漁況の経過の結果を主要な情報として、8月～9月における来遊量を予測すると、常磐～道南太平洋における来遊量は前年並み、道東太平洋は前年を下回ると予測される。各海域における見通しは以下の通りである。

1. 常磐～三陸海域

この海域の漁獲対象資源は太平洋沿岸域を北上する群を主体に、津軽海峡から来遊する日本海由来の群が含まれると考えられる。三陸周辺海域（41°N以南、143°E以西）における漁場一斉調査でのCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）は前年を下回ったものの、青森県白糠港に水揚げされた小型いか釣り漁船によるCPUEは前年を上回った。このことから、太平洋沿岸域を北上する群の来遊量は前年並みと予測される。さらに、津軽海峡からの来遊量も、前年並みと予測される（後述）。以上のことから、常磐～三陸海域への来遊量は前年並みと予測される。第2回東北海区海況予報（水産総合研究センター）によると、近海の黒潮続流の北限位置は前年並み～やや北偏を予測していることから、沿岸域を北上する群れの移動は早い可能性がある。魚体サイズは、漁場一斉調査の測定結果から、前年並みと考えられる。

2. 津軽海峡～道南太平洋

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沿岸を北上する群と津軽海峡から来遊する日本海由来の群が含まれると考えられる。函館港に水揚げされた小型いか釣り漁船によるCPUEは前年並みであり、津軽海峡東口周辺海域（41°N以北、143°E以西）における漁場一斉調査でのCPUEも前年並みであった。前述のとおり、太平洋沿岸を北上する群の来遊量は前年並みと予測されたことから、津軽海峡東口～道南太平洋海域への来遊量は前年並みと予測される。6月下旬～7月上旬に日本海で実施された一斉調査結果から、津軽海峡西口周辺海域における来遊量も前年並みと予測された。以上のことから、津軽海峡～道南太平洋海域への来遊量は前年並みと予測される。本予報期間においては日本海由来の来遊量が多いことが見込まれるため、魚体サイズは日本海漁場一斉調査の測定結果から、前年より大型の個体が主体になると考えられる。

3. 道東太平洋

この海域に来遊する漁獲対象資源は、沖合域を北上する群と考えられる。漁場一斉調査における沖合域（143°E以东）でのCPUEは前年を下回ったことから、スルメイカの来遊量は前年を下回ると予測される。水産総合研究センターの海況予測システム（FRA-ROMS*）によると、本年は道東太平洋海域付近に暖水塊が形成されていることから、道東沿岸域への主群の北上回遊は前年よりやや早いと予測される。魚体サイズは、漁場一斉調査の結果から、前年より大きい個体が主体になると考えられる。

*国立研究開発法人水産総合研究センターにより開発され、2012年5月より運用を開始した海況予測システム

II 調査結果

A：漁場一斉調査

1) 太平洋第1次漁場一斉調査

6月上旬～6月下旬に太平洋で実施された漁場一斉調査（釣り）の結果、調査海域全体の平均 CPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）は1.01尾であり、前年（1.55尾）を下回った（図1）。

三陸周辺海域では0.07尾であり、前年（0.10尾）を下回った。津軽海峡～道南太平洋海域では漁獲がなかった（前年0.01尾）。沖合域では1.37尾であり、前年（2.30尾）を下回った。

漁場一斉調査で漁獲されたスルメイカの外套背長組成は、モードが17cmにある単峰型の組成で、前年（15cm）より大型であった。海域別にみると、三陸周辺海域のモードは16cmにあり前年（16cm）並みであったが、小型個体の割合が高かった（図2）。沖合域のモードは17cmであり、前年（15cm）よりも大型であった。津軽海峡～道南太平洋海域での漁獲はなかった。

2) 日本海漁場一斉調査

6月下旬～7月上旬に日本海で実施された漁場一斉調査の結果、津軽海峡西口周辺海域（39°N～42°N、138°E～140°E）における平均 CPUE は16.3尾であり、前年（14.0尾）並みであった。外套背長組成はモードが20cmにあり、前年（19cm）より大型であった。

B：新規加入量調査結果（参考情報として掲載）

5月下旬～6月上旬に太平洋で実施された新規加入量調査（表中層トロールネット）の結果、外套背長5cm未満のスルメイカの平均漁獲尾数（30分曳網当たり漁獲尾数）は90尾で、前年（78尾）並みであった。予測期間内に漁場への加入が見込まれる外套背長5cm以上の個体の平均漁獲尾数は50尾で、前年（21尾）を上回った。分布域の中心は外套背長5cm以上の個体は、38°N以北であった（図3）。

新規加入量調査で漁獲されたスルメイカの外套背長組成のモードは3cmにある単峰型で、前年（1cm）より大型であった（図4）。

III 各海域の漁況経過（5月～6月）

2010年以降の太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）における年間漁獲量は10万～15万トンで推移している（図5）。主漁場は常磐以北太平洋海域であり、来遊経路から常磐～三陸海域と津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域に区分される。2014年8月～9月の漁獲量（生鮮）は31千トンであり、常磐～三陸海域では11千トン、津軽海峡～道南太平洋海域では4千トン、道東太平洋海域では11千トン、根室海峡～オホーツク海および太平洋のそれ以外の海域では5千トンであった（図6）。

各地域での漁況経過を表1に示した。2015年5月～6月の太平洋沿岸主要港での水揚げ量（生鮮：速報値、一部未集計）は690トンで、前年（608トン）を上回った。常磐～三陸海域の水揚げ量は475トンで前年（242トン）を上回った。津軽海峡～道南太平洋海域の水揚げ量は116トンで前年（153トン）を下回った。千葉県以南の漁獲量は99トンで前年（213トン）を下回った。

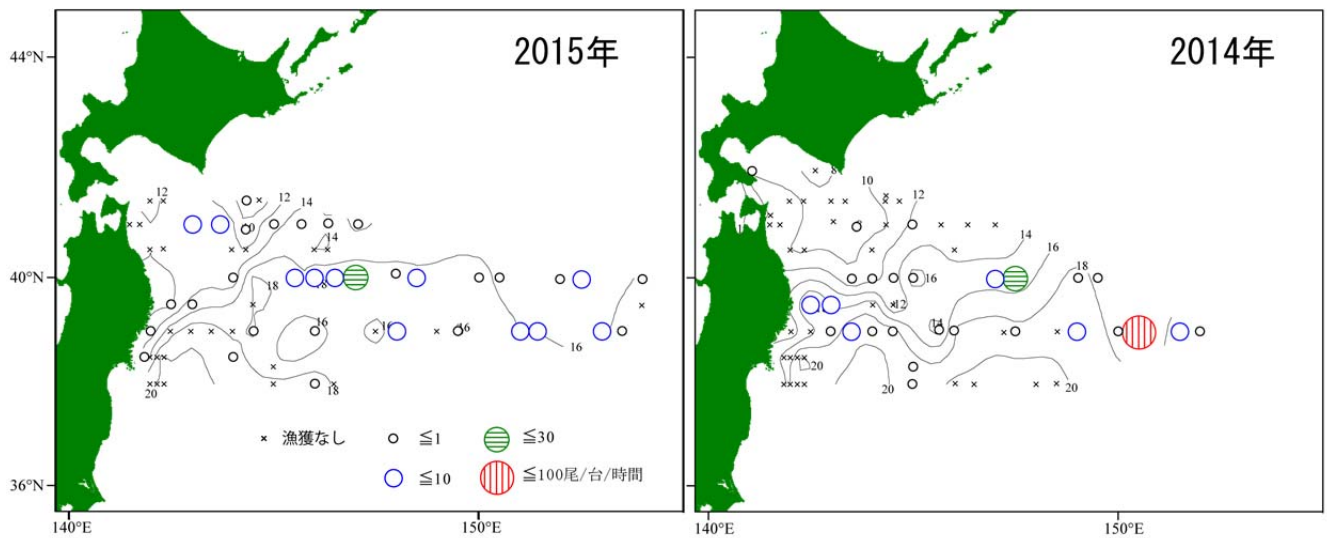


図1. 太平洋第1次漁場一斉調査の結果
 2014年、2015年6月上旬～6月下旬のいか釣りによるスルメイカのCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布。×は漁獲が無かった点。
 実線は等温線（海面水温）を示す。

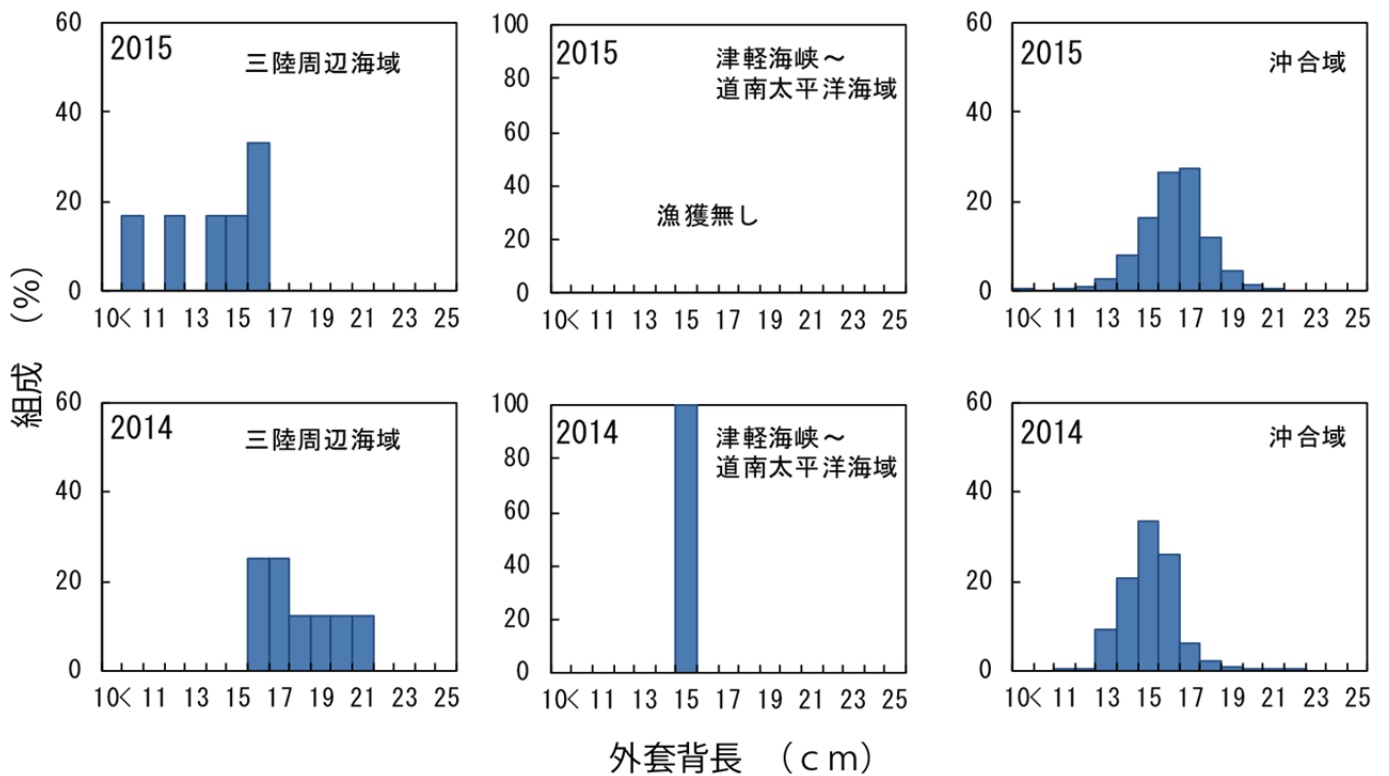


図2. 太平洋第1次漁場一斉調査（三陸周辺海域・津軽海峡～道南太平洋海域・沖合域）による外套背長組成の結果

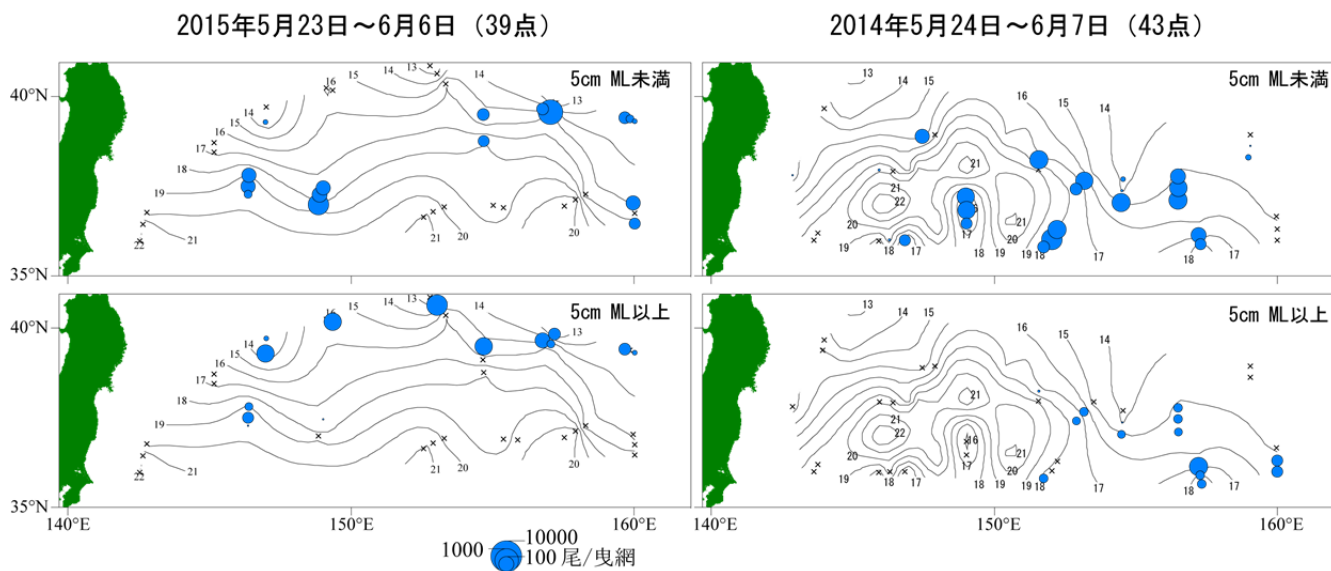


図3. 新規加入量調査の結果

2014年、2015年5月下旬～6月上旬の表中層トロールによるスルメイカのCPUE（30分曳網当たり漁獲尾数）の分布。×は漁獲が無かった点。実線は等温線（海面水温）を示す。

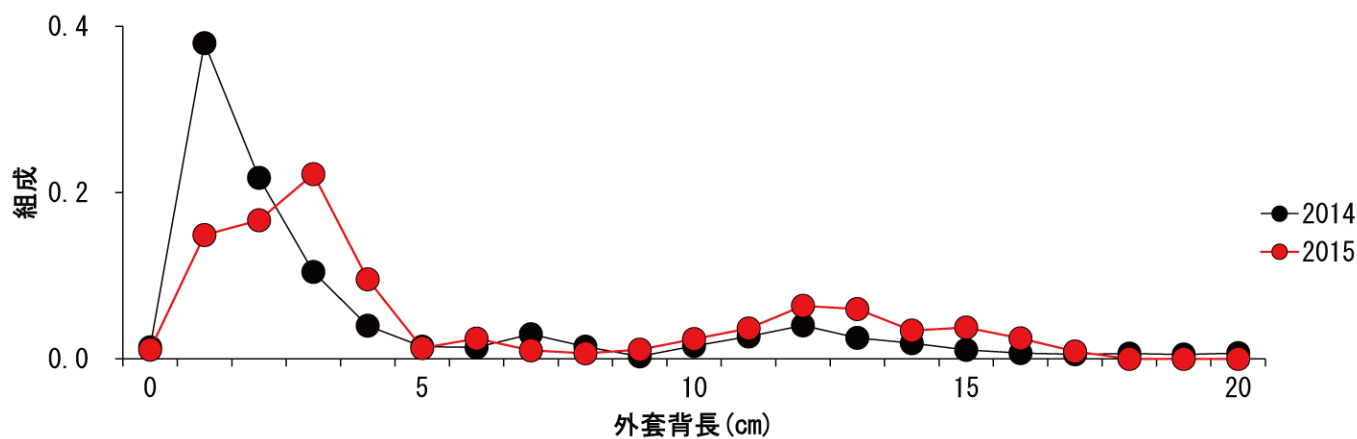


図4. 新規加入量調査による外套背長組成の結果

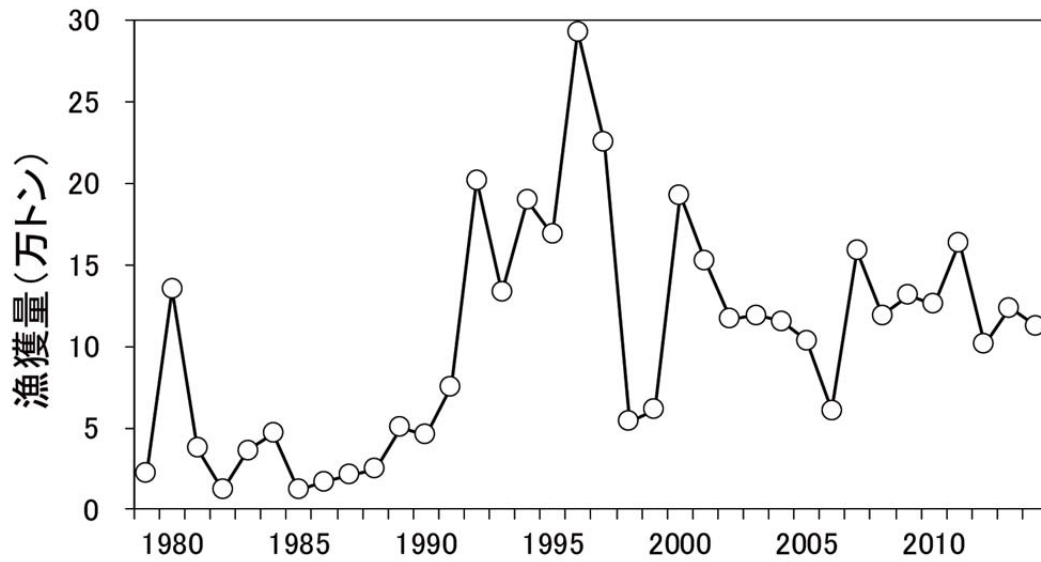


図5. 太平洋におけるスルメイカの年別漁獲量の推移

(集計値は暦年)

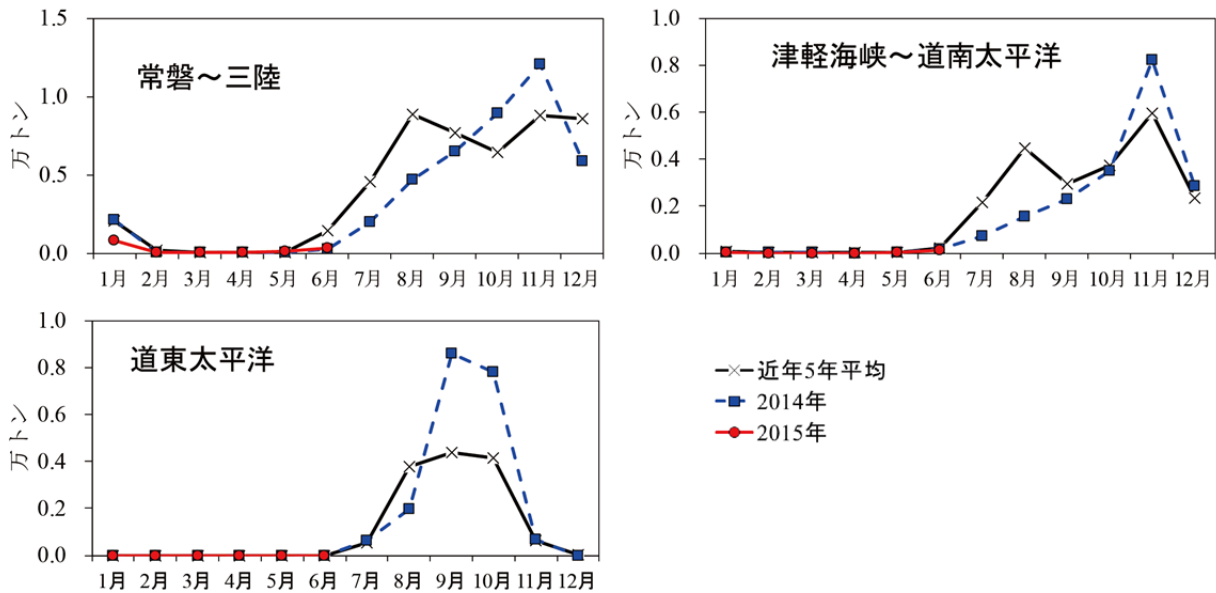


図6. スルメイカの月別海域別漁獲量 (生鮮)

近年5年平均は2010年～2014年の平均

(釣り・定置網・底びき網・まき網)

表1. 漁況経過 (2015年5月～6月、一部未集計・暫定データ含む)

	漁況経過
北海道 道東	厚岸港において7月11日に釣りによる初水揚げがあった（前年は釧路港で7月15日）。
北海道 道南	6月における函館港での釣りによる水揚げ量は82トンで、前年比131%であった。CPUEは前年比103%であった。
青森	6月の白糠港への釣りによる水揚げ量は115トン（前年は1トン）であった。CPUEは前年比1035%であった。6月の八戸港と大畑港の釣りによる水揚げは31トン、1トンであった。
岩手	6月の主要7港による水揚げは、底びき網による漁獲が2トン（前年比374%）、定置網による漁獲が55トン（前年比97%）であった。
宮城	5月～6月の主要10港における水揚げは、底びき網による漁獲が10トン（前年比39%）、定置網による漁獲が10トン（前年比9%）で、釣りによる漁獲はなかった。
福島	沖合底びき網及び小型底びき網漁業による試験操業が実施されており、6月の小型底びき網漁業による若干の水揚げがあった。
茨城	5月～6月の主要港における水揚げは、沖合底びき網による漁獲が1トン（前年比11%）、小型底びき網による漁獲が1トン（前年比12%）であった。
千葉	5月～6月の主要港における水揚げは、定置網による漁獲が4トン（前年比80%）で、6月の釣りによる漁獲はなかった。
神奈川	5月～6月の主要2港における定置網による水揚げ量（2トン）は前年（7トン）を下回った。長井港における釣りによる水揚げ量は1トンで前年（1トン）並みであった。
静岡	6月の仁科浜における釣りによる水揚げ量（10トン）は、前年（15トン）を下回り、CPUEは前年比82%であった。
三重	5月～6月の主要港における中型まき網による水揚げ量（65トン）は前年（107トン）を下回った。
和歌山	5月～6月のすさみ港における釣りによる水揚げ量（6トン）は前年（5トン）並みであり、CPUEは前年比163%であった。
高知	5月～6月の主要3港における釣りによる水揚げ量（0.02トン）は、前年（0.31トン）を下回り、CPUEは前年比52%であった。

注：CPUEは1日1隻当たり漁獲量

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	三重県水産研究所
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	和歌山県水産試験場
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
福島県水産試験場	国立研究開発法人 水産総合研究センター 東北区水産研究所 日本海区水産研究所
茨城県水産試験場	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産総合研究センター 北海道区水産研究所
千葉県水産総合研究センター	
神奈川県水産技術センター	
静岡県水産技術研究所	